ただ、それだけを知りたい

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ただ、それだけを知りたい

【Ｎコード】
Ｎ４７７６Ｚ

【作者名】
カーテンコール

【あらすじ】
土砂崩れで死んだ、１人の青年。異世界へと生まれ変わった彼であるが、再び与えられたその命には、大きな制限が掛けられていた。運命に翻弄される彼に、果たして『救い』はあるのだろうか……。

終わらない、絶望への序曲

人は、桜が如く。

ただひと時咲いては散り、後に残るは醜い枯れ木のみ。

……これは一体、誰の言葉だったろうか。

「最悪、だな」

過剰なほどに整備された白い建物を見上げながら、そんな台詞が口を衝いて出た。

こんなに気分が悪いのは、生まれ変わった初日と『あの日』以来。

……俺は、死人だ。正確には、1度死んで再び生まれた身だ。

輪廻転生。元は仏教だか密教だかの用語らしいけど、生憎俺は前世(むかし)も現世(いま)も無神論者だから、詳しくは知らない。

けどとにかく、その転生とやらを経た人間であることは間違いないと思っている。

忘れもしない。あの日、土砂崩れに巻き込まれて死んだ前世。

それから碌な間さえ置かず、再び赤ん坊になった。

「あれから、15年と少々」

容姿も変わった。

在り方も変わった。

変わらなかったものなんて、見付かりそうにないくらい変わった。

俺も……世界も。

「インフィニット・ストラトス……」

通称ISとも呼ばれる、大気圏外長期活動用マルチフォーム・スーツ。

……などとは名ばかりの、危険極まりない兵器。その圧倒的技術

力により作られた、云わば時代を先取りしすぎた存在。

そして俺の、全てを狂わせた災厄（モノ）。

「ちぃっ」

舌打ちのひとつもしたくなる。

ＩＳさえ無ければ、俺のこの第２の人生が狂う事は無かった。

神など信じていないこの身だけれど、もし居るとするなら住処まで乗り込んで、殺してやりたい。

ややこしい真似をしてくれた、死んで詫びろと声高に叫びたい。

お陰で俺は――否。

居もしない存在に文句を言ったところで、壁に怒鳴るのと同じだ。

そんな無駄な事、してもしょうがない。

結局のところ、俺のこの非力な腕では何も出来ないのだから。

「……」

分かり切っている。

俺に出来る事なんて、何も無いってぐらい。

「……時間だ」

腕時計の短針が、そろそろ8を刻もうとしていた。

もう行かないと――初授業に遅れてしまう。

俺はひとつため息を吐いて。

先程から見上げていた建物……『IS学園』に向けて、足を踏み出した。

「最悪、だな」

最後にもう1度、同じ言葉を呟いて。

本当の『3人目』

6月終盤。

ここＩＳ学園では中止という形にしろ、つい先日大きなイベントであった学年別トーナメントも終わり、更に1年生は臨海学校が目と鼻の先となった時節。

しかして今日この日は、何事も無く過ぎ去るごく普通の日。

その筈だった。

「転校生？　また？」

1年1組の教室。

そこで俺は、何故か待ち構えていた鈴に捕まり、『転校生』の話題を聞かされていた。

「そうよ。うちのクラスがその話題で持ち切りで、うるさいから逃げてきちゃった」

「フン、白々しい……」

何故か不機嫌な箒。一体どうした、カルシウム不足か？

煮干し食え。

「……一夏。何か今失礼なことを考えなかったか？」

「いやそんなまさか」

危ねぇ。心を読まれた。

「けど、やっぱり1組なのかな？」

そう言ったのは、つい先日『シャルル』から『シャルロット』として再転入した友人。

鈴の話からすると、そうらしい。また山田先生の睡眠時間が削られそうだ。

「しかし、転校生か。もしかして男だったりしてな」

「それこそ有り得んだろう。男のＩＳ操縦者は、お前と……」

ちらと、教室の一角を一瞥する箒。

そこには、ラウラとセシリアを相手に話しかけているもう１人の『男子生徒』が居た。

「あの下衆だけだ」

「下衆って……そりゃ言い過ぎだぞ箒」

「あのような輩、下衆で十分だ。見られるだけで虫唾が走る」

プイッと顔を背ける箒。余程あいつが嫌いらしい。

箒だけじゃない。鈴は頷いて肯定してるし、シャルロットも苦笑

はすれど否定はしない。

……ついでに言えば、あいつに話しかけられてるラウラやセシリアも、思いっきり不機嫌を露わにしてる。

それでも必死になって話しかけてるあいつが、何だか可哀想になってきた。

よし。ここはクラスメイトにして唯一の同性である俺が、さりげないフォローを――

「お前達！　ホームルームだ、さっさと席に着け！」

しようと思ったところで、千冬姉が出席簿片手に教室に入ってきた。すまん、無理だった。

刹那、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』さながらの速さで席に戻るクラスメイト達。すげえ。

鈴も以前の恐怖からか、いつの間にか消えてた。

「ふん、やればできるじゃないか。では山田先生、頼んだ」

「……あ、はい……分かりましたぁ……」

いつものようにバトンタッチされた山田先生から、いつもと違っ

て魂が抜けていた。やっぱり睡眠時間削られてたらしい。

「えぇっと……知ってる人はもう知ってると思いますけど……ホームルームの前に、転校生を紹介したいと思います……もうほんと勘弁してください、私の睡眠時間が、あぁぁぁ……」

今にも処理落ちしそうだ。惨い。

「転校生だと!?」

バン、と立ち上がる音。

振り返ったら、後ろの席であいつ……銀崎(ぎんざき)が驚いた風に山田先生を見てた。

てか、あいつ知らなかったんだ。

ラウラとシャルロット、それに鈴の時は凄い詳しく知ってたから、そういった情報に関しては通だと思ってたけど。

「席に着け、銀崎」

「っと……すいません、織斑先生」

千冬姉に睨まれて、座り直す銀崎。

けどその顔には、未だ疑問の表情がありありと出ていた。

「（しかし本当に1組だったな。もう今更だけど、本当に分散させないでいいのか？）」

至極まっとうな事を考えていたら、教室の扉が開かれた。

あれ、何かこのパターン前にもあった気がする。

「……」

無言の入場。あ、これも前にあったパターンだ。

よし、『P（パターン）・ラウラ』と名付けよう。今決めた。

うんうん、俺って結構センスあるんじゃないか？

「……」

そんな下らない事を考えていたら、ふと教室のざわめきが消えている事に気付いた。

何だ？　今度は『Ｐ・シャルル』か？

「……へ？」

考えながら、転校生の姿を見遣って。

思わず声が出た。

ざわめきが収まる訳だ。何故なら。

その転校生が――俺が半ば冗談で言った通り、『男』だったのだから。

2人の転生者

さて。俺は今、ひっじょーに困惑している。

え？　俺は誰かって？

そんな！　この俺、銀崎飛竜（ひりゅう）を知らない！？　寄る年波の所為でボケた神様に間違って殺され、その侘びとしてここ『インフィニット・ストラトス』の世界に転生させて貰って、ヒロイン達で構成したハーレムを築く為に日々奮闘しているこの俺を！

……どうにもフラグ立てが難航してて、未だ1人も落とせてないけど。

箒や鈴はまあ仕方ないにしても、他の3人はいけると思ったのに。

原作ではどうなるにしろ、少なくとも最初の条件は一夏の野郎とイーブンだったんだから。

けど実際は、クラス代表決定戦では一夏と違って俺は専用機到着

が間に合わず、結果セシリアと戦う事無く棄権。一夏にまんまとフラグを盗られた。

シャルロットとラウラの時だって、何故かいいタイミングで必ず何らかの邪魔が入って撃沈。これが原作の修正力ってやつか！？

だが俺は諦めない！　元はライトノベルだろうとここは現実、アピールを続ければきっといつかは報われる筈だ！

もっとも彼女達からすれば、同性ゆえに一夏が気安く接してくる俺は、云わば邪魔な存在らしくて邪険に扱われる事もしばしばだけど。

ああいや、それとも気を引こうと色々やったのが問題だったんだろうか……悩む。

おまけで神様から頭脳や運動神経、それに一夏級のイケメンフェイスを貰ったから、見てくれとかが原因とは思えないが。

……まあいいさ！　学生生活は始まったばかり、まだまだチャンスはてんこ盛りだ！

それに例え、今の5人が駄目だったとしても。まだ生徒会長の更識楯無に妹の簪、臨海学校で出会うナターシャさんとか、美人は山ほど居るし！

ちなみに更識姉妹とはまだ接触してない。楯無先輩は迂闊にこちらから接触したら怪しまれかねないし、簪の方は純粋に見当たらない。

４組も整備室も結構虱潰しに探してんのに、なんで？　いつも行った時居ないんだよな。

仕方ないから、気長に向こうからアクション起こすのを待ってる。

……俺の現状はこれぐらいでいいか。それより今は緊急事態だ。

「では……自己紹介を、お願いしますぅ……」

静まり返った教室、電子パネルの前に立つ男。

そう、『男』なのだ。

ラウラよりも長い、腰どころか膝まで伸びた赤髪。

若干釣り上った双眸に収められた、無機質染みた黒い瞳。

ほっそりとした整った顔立ちに、右眼の下から頬にかけて、ムカデのようなタトゥーが刻まれてる。

普通だったらあいたたたーなその装飾が、とんでもなく様になってた。

全体的に細身だが、軟弱さや貧弱さがまるで感じられない。

そして極めつけは、着ているその学生服。

ＩＳ学園の男子制服は、一夏や俺が着ている襟元だけ黒く、全体

が白の配色がベースだ。

けど赤い髪の男はそれが逆転してて、襟元だけ白く全体が黒の制服姿。

なんかこう、ダークヒーローっぽくてカッコいい。是非真似してえ。

けど簪が好きそうじゃないなあれ、止めた。

「……」

とにかく、バカみたいな美形。

あんな見てくれ自然発生するわけねえ。どう見ても俺と同じ『転生者』だ。

「そうだ、そうに決まってる……」

「私語は慎め銀崎」

バゴス！

「ぐべらっ！？」

織斑先生に出席簿で殴られた！　滅茶痛え！

……と、とにかくだ。あいつが転生者ならば、これから先俺のハーレムを築く障害になりかねない。

ただでさえ難航してるってのに、これ以上敵が増えるなんて御免だ！

……ここは一発睨みを利かせておくか。

喰らえドラゴンアイ！！　飛竜だけに！！（ただのガン飛ばし）

「……」

気付かれさえしなかった。泣きてえ。

つうかこの野郎、何で目にハイライトが無いんだよ！　その所為で何見てんのかさっぱり分かんねえよ！

ああ遣り辛い！　てかいい加減なんか喋れよ！　「またですか～？」って、山田先生泣きそうになってんじゃん！　泣いてても可愛いな畜生！

それにラウラが「何か転校初日の私を思い出す、鬱だ……」とか落ち込んでるじゃねえか！　俺の未来のハーレム要員に何しやがる！！（現在好感度最低）

これからこのクラスの一員としてやっていく気あんのか？　無いなら無いで俺は助かるが。

「……ふぅ」

……お？　ようやく口を開けたぞ。

さあどうなんだ。フレンドリーにするのかしないのか！

「……」

口を開けて、少々の間を置いて。

紡がれた言葉を聞いて、俺は心底安堵した。

「……雌臭い……最悪、だな」

ああ。こいつクラスに馴染む気、全く無いや。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4776z/

ただ、それだけを知りたい

2011年12月17日01時02分発行